The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	北川順也著『お寺が救う無縁社会』
Author(s)	横井, 桃子
Citation	宗教と社会貢献. 2011, 1(2), p. 123-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/19440
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

北川順也著
『お寺が救う無縁社会』
幻冬舎ルネッサンス、2011 年 4 月、新書版、272 頁、857 円

横井　桃子*

1. 本書について

近年、日本は無縁社会となりつつあるといわれている。特に大都市では人間関係が希薄化し、昔のようなぬくもりのある繋がりを見出すことすら困難になってきた。幼児虐待や孤独死、格差や環境問題などの悲惨な状況はそのあらわれであるといえる。浄土宗開教使であり、なおかつ大学院で社会環境について研究している著者は、多くの問題を抱える現代日本に対して「お寺」（本書の趣旨を生かし、以下、寺院でなく主としてこの表現を用いる）が関わることは非常に有効であるという論点のもと、活発な活動をおこなうお寺へと赴き、インタビュー調査を行っている。本書は、その事例をまとめ、お寺の社会への有用性、あるいはお寺と社会の共生について分かりやすく書かれている。

メディアが取り上げるお寺の布施や戒名料の問題もあり、世間からお寺へ向けられる目は厳しいものがある。その裏でお寺が地域に根差した社会貢献活動を展開していることも事実であり、しかしながらそういったお寺のポジティブ面はあまり取り上げられず認知されていないという。著者はこのようなお寺の社会貢献活動を周知させ広げていくことが、無縁社会と呼ばれる日本の惨状を打破する一手となると考えている。

本書は、その大部分を事例報告に充てており、取り上げたお寺の活動テーマも福祉や平和、エンターテイメント、環境保全と多岐に渡る。貧困や自殺という「苦」に対する仏教者の社会福祉活動は以前から取り上げられることも多く、本書の事例として挙げられることも至極当然と感じられるが、「苦」に立ち向かう仏教者の姿とはかけ離れたようにも見える娯楽を提供する場所としてのお寺、さらに仏教が日本に伝来した頃には考えられなかったであろう環境問題に取り組むお寺といった事例は、読者にとっては非常に新鮮なテーマではないだろうか。また、取り上げられたのは大都市・

* 大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程・mmk_3o17@yahoo.co.jp

東京に所在するお寺の事例であり、大都市ならではの活動であるともいえる。いずれのテーマ・事例にしても、根底にあるのはお寺を通した「人とのつながり」や「社会との共生」であり、地域コミュニティの再生へのお寺の存在価値を明確にしたいという著者の思いであるだろう。また「持続可能な社会づくり」というキーワードが繰り返し述べられ、そこにお寺が役立つ可能性を見出している。環境保全や経済開発といった側面で語られることの多いこの言葉だが、本書で示されたようなお寺の社会活動が各地へ普及し、地域コミュニティが再びつくられていく先に、持続可能な社会があるのではないかというねらいが感じられた。

2. 本書の構成

本書は全五章からなる。そのうち序章と終章を除いた三章分がテーマごとに分かれた事例集となっており、一目で理解できる章立てとなっている。以下に各章の概略を記す。

まず第一章では導入として、仏教が日本へ伝来して以降の、仏教者や寺院が行ってきた社会的活動の歴史を概観しながら、現代におけるお寺の有効性を述べている。仏教教団が政界や世俗的集団の勢力の支配や影響をときに受けながらも、仏教者たちは苦悩する民衆に手を差しのべてきた。江戸時代に寺壇制度が敷かれ、それまで地域コミュニティの中にあったお寺の活動は次第に檀家制度に頼ったクローズドなものとなっていった。人と人との関係が薄れてきた現代においては檀家制度というシステムは名実ともに衰退し始めており、今こそ仏教の教え・お寺が地域コミュニティの再生に役立つべき時であると著者は主張する。

第二章は、高齢者介護、貧困、自殺といった現代の諸問題に苦悩している人々にかかわろうとするお寺を事例に挙げている。数回にわたる往復書簡によって自殺念慮者の思いに寄り添う僧侶のグループ。NPO と協働して、路上生活者への支援をおこなう若い僧侶たち。また 365 日欠かさず門を開く正山寺には、人生においてさまざまな問題を抱える人々が訪れる。認知症高齢者のための介護・生活施設を擁する妙徳教会のビハーラ活動。仏教の教えをもとに平和憲法を守る運動を続ける宗善寺は、地域の中で中心的な存在だ。いずれも、人々への思いやりにあふれた僧侶の寄り添いの形で

ある。

第三章では、エンターテイメントを提供することで地域に開かれたお寺を事例調査している。地域に溶け込み一体となって街づくりを進める善国寺。地域の人々の声を聞きお寺での多様なイベントを企画する経王寺。仏教の縁起思想からお寺で婚活イベントを開く圓融寺。様々なイベント開催を経て境内にオープンテラスを開いた光明寺。高齢者のための朗読会はもちろん社会に必要なイベントを適時開催する蓮華寺。お寺や境内という社会的資産を有効に活用し、地域の人々が親しみをもって参加している状況がうかがい知れる。

第四章では、民有地の樹林の中でも寺院・墓地の緑地が重要な位置を占めており、緑地確保に行政が政策を行う文京区内のお寺を調査している。樹林だけでなく、寺院空間を社会的・文化的ストックとしてその保持に努める願行寺。広大な緑地にもかかわらず自ら技術を習得し剪定に参加する僧侶。樹林の名札や縁台などを取り入れ、さり気なくもきめ細やかな心配りで訪れる人々をもてなす圓通寺。未だ課題は多いが、都市における貴重な緑地空間として地域と共生しているお寺である。

第五章では、これまで挙げてきた事例を踏まえ、再度お寺の社会における役割を問い直し、持続可能な社会を実現していくためのより具体的な方法を示している。特に筆者の問題関心もあり、自然環境の維持に文化的・社会的資源としてのお寺が寄与できることを強調している点が本書の特徴である。グローカルな視点から、今後地域コミュニティの再生復興のためにお寺に期待できる点は非常に多いことを述べ、お寺にかかわる者への激励に代えている。

3. 本書へのコメント

今、寺院の地域・社会へのかかわりが求められている。「無縁社会」にかかわる問題に真正面から取り組む僧侶の目覚ましい活躍は、近年メディアでも広く取り上げられ、注目を浴びている。その姿は、檀家制度に頼り切ってきた寺院・住職像とは異なり非常にラディカルで、見る者にインパクトとパワーを与える。本書もそういった事例を多数取り上げており、示唆に富んでいる。

取り上げられた事例の活動形態やテーマは多様で、特に第三、第四章に挙げられる事例は、伝統的な仏教寺院と現代的なエンターテイメントとの融合であったり、昔では考えられなかった自然環境の問題に取り組む活動であったりと、読者には非常に真新しく感じられたのではないだろうか。そして全体を通して、僧侶がいずれも意欲を持って生き生きと活動している様子が、短い事例の中にも描かれている。僧侶の社会的活動へのコミットメントの度合いが多種多様であることも、特筆すべき点である。本節冒頭で述べたメディアが取り上げる僧侶の偉大な社会貢献活動は確かに大きなエンパワーメントを有しているが、しかし大部分の僧侶がそのようなある意味で「大きな」社会貢献活動に踏み出せずにいることも事実であろう。本書で述べられる多様な事例のいくつかは、そういった僧侶に活動への親しみやすさ・取り組みやすさを感じさせるのではないか。応用可能な事例がいくつもあるのが本書の魅力であろう。

一つだけ指摘をするならば、事例や著者のお寺ビジョンが都市に限られており、地方でのお寺の役割についてあまり言及されていない。都市での地域コミュニティへのお寺の参与ももちろん重要であるが、地方や田舎のお寺における活動は、都市とは違った形で重要であると考えられる。今後過疎化が進むであろう地域でも、お寺がどのように人々にかかわっていくのかを考察することは必要だろう。また都市と地方で異なるお寺の役割を比較することで、今後の展望もさらに広がるのではないだろうか。

しかしながら本書の中でも述べられているように、都市のお寺が積極的に社会活動をするところから地方へ波及していく効果は大きく期待できる。東京を含めた大都市が社会文化の最先端となり、様々な運動や流行を生み出していることは紛れもない事実である。お寺の社会貢献も、都市が力を入れて精力的におこなわれることで、全国 7 万超のお寺のブームとなり、やがて地域に様々なお寺の社会貢献活動が定着していくことが望まれる。今後のお寺の活動に新しい視点を与え、なおかつお寺の今後に期待を抱かせる良書である。